

2017年度工業高校における寺島メソッド基礎3教材を使った2年生の授業を振り返って

会員 中西 毅

NAKANISHI Takeshi

- 1 はじめに
- 2 1年間の授業の振り返り
 - 2.1 教材
 - 2.2 評点方法
 - 2.3 クラス間の差
- 3 学年末テストの結果の省察
- 4 来年度の授業をどうするか？
- 5 終わりに～本質を大事にするということ～
- 6 生徒の声
- 7 後記

1 はじめに

2017年度も、もうすぐ終了します。今年度は3年生のコミュニケーション英語Ⅱ2単位を5クラス3年間持ち上がったクラス、2年間持ち上がったクラス、今年1年だけ担当したクラスと様々でしたが、基本的にどのクラスも、同じ授業形態でした。授業スタイルは、評点方法を完全にガラス張りにした完全個別スタイルでした。(詳しくは寺島メソッド同好会のホームページに掲載していただいた「寺島メソッドマラソン方式ー完全個別タスク型授業の導入ー」をご覧ください)。「英語の授業は今まで苦でしかなかったけど、この1年で、英語の勉強が楽しくなった」「日々の取り組みだけで赤点が回避できるので、やる気が入った」「FLTの先生とのトーク、歌の暗記やリズム読み、書写、和訳プリントなどやることがいろいろあって、楽しかった」「この授業を通して自主性が身についた」「わからないところは先生や友達にすぐ聞けるのでよかった」「外国の人とも壁を作らずに自分から話しかける積極性が身についた」「英語の歌やレミゼラブルの映画の素晴らしさに気づけた」など、彼らの多くは、英語の授業に対して好意的な感想を残して卒業していきました。個別式なので、生徒一人一人との関わりが深まり、僕にとってもとても楽しい授業でした。最後の授業では、僕のギターの弾き語りでお別れ、卒業式の退場の時は、一人一人とハイタッチして送り出すなど、彼らとすごした時間は、いい思い出になりました。

ただし、彼らに英語を理解したり英語で表現したりする力をつけてあげたかどうかは大きな疑問が残ります。教材の与え方や、それぞれの学期や1年間でどんな力の習得を目指すか、そして、それを問う定期テストをどうするかという問題については、見通しをもてないまま、だらだらと時間が過ぎてしまいました。せっかく楽しい思い出をくれた彼らに申し訳ないです。

彼らとともにすごした時間の証として、彼らが残してくれた感想文を何らかの形で文章に残したいとは思っていますが、今回は、その3年生のことは書きません。コミュニケーション英語Ⅱ2単位を3クラス担当した2年生の授業実践について考察していきたいと思います。というのも、2年生の授業については、2学期から寺島メソッド基礎3教材(the turnip, the hole, the house)を手探り

ながら導入し、とくに最後の the house の実践を通じて、英語の授業で幹として伝えるべきことは何か、おぼろげながら見えてきたからです。

この文章の目的は、今年度 2 年生 3 クラスで、どんな授業をしてきて、どんな課題が残っているのか顧みること、そして来年度、彼らとどんな授業をするのか、さらに、来年度から新しく担当するであろう、新 2 年生や新 1 年生とどんな授業をするかを構想することです。その中で、先日、寺島先生から与えられたテーマである「英文法をどうとらえ直すか」についても考察を深めていきたいと思えます。

2 1 年間の授業の振り返り

	評点方法	30 点タスク
1 学期前半	定期テスト 70 点 + タスク突破点 30 点 + ボーナス(無制限)	① We will rock you 和訳プリント 6 枚 ② We will rock you 歌詞書き写し 5 回 ③ テーマ作文(1 枚以上) ④ ふりかえり作文(半分以上) ⑤ We will rock you の歌(リズム読み)(1 番)テスト合格 ⑥ We will rock you の暗記テスト(1 番)合格 ⑦ FLT トーク
1 学期後半	定期テスト 60 点 + タスク突破点 30 点 + ボーナス(無制限)	① 教科書 和訳プリント 8 枚 ② 「民衆の歌」歌詞書き写し 5 回 ③ テーマ作文(1 枚以上) ④ ふりかえり作文(半分以上) ⑤ FLT トーク ⑥ 「民衆の歌」リズム読みテスト ⑦ 「民衆の歌」暗記
2 学期前半	定期テスト 60 点 + タスク突破点 30 点 + ボーナス(無制限)	① 夏休みの宿題 ② Turnip 書き写し 5 回 ③ Turnip 和訳プリント 10 枚 ④ ふりかえり作文(1 枚以上) ⑤ FLT トーク ⑥ Turnip リズム読みテスト ⑦ Turnip 暗記テスト
2 学期後半	定期テスト 60 点 + タスク突破点 30 点 + ボーナス(無制限)	① Hole 書き写し 10 回 ② Hole 和訳プリント 5 枚 ③ 教科書 和訳マラソン 7 枚 ④ ふりかえり作文(1 枚以上) ⑤ FLT トーク ⑥ Hole リズム読みテスト ⑦ Hole 暗記テスト
3 学期	定期テスト 50 点 + タ	① House 書き写し 10 回

	スク突破点 30 点+ ボーナス(無制限)	② House 和訳プリント 7 枚 ③ 教科書和訳マラソン 7 枚 ④ ふりかえり作文(1 枚以上) ⑤ FLTトーク ⑥ House リズム読みテスト ⑦ House 暗記テスト
--	--	--

上の図は、今年度各タームでどんな教材を使ったか、どんな評点方法を採用したか、どんなタスクを生徒に課したのかの一覧表です。2 年生の 3 クラスというのは、土木科、創造技術科、化学技術科という 3 つの科です。上の表は、そのうちの化学技術科のものです。

上の表をもとに、①教材②評点方法③クラス間の差という 3 点について振り返っていきます。

2.1 教材の反省

基礎 3 教材導入前夜

まず、教材について振り返ります。創造技術科と土木科については 1 年生から持ち上がっているので、1 年生からリズム読みや書写などをとりいれてきました。化学技術科については、今年から担当したので、まずは、リズム読みの教材としてインパクトの強い、Queen の We will rock you のリズム読みと歌詞の和訳プリントでスタートしました。1 学期後半からは、3 科ともほぼ同じ教材です。1 学期後半は、「散文は教科書で、韻文は歌で」というやりかたですすめたのですが、生徒の意識が分散して、歌詞の内容や教科書の英文、文法項目などがあまり定着しなかった反省がありました。夏休み中色々構想して、ここは寺島メソッド基礎 3 教材にすぎるしかないなど実践に踏み切りました。

Turnip と Hole の実践

2 学期は、Turnip を導入してみました。手探りで導入だったので、「もっとリズム読みの練習を全体ですべきだった」「リズム読みテストを一人でやらせたのは意味があまりなかった」「せんまるせんをもっと生徒に意識させるような練習問題を用意すべきだった」など、今思えば、反省の残るつたない実践でしたが、おじいさんや、猫や孫娘の絵を順番に指さしながら、生徒たちが暗記にチャレンジし、見事突破してどや顔で帰って行く姿は、見ていて楽しかったです。

2 学期後半は、教科書の和訳プリントも加えて、今度は hole をやってみました。授業が完全個別スタイルで、教室に来た生徒が、自分のペースでやりたいタスクを選んですすめるというスタイルでしたので、全体で一斉にリズム読みの練習をしたり、書写をしたりしませんでした。かわりに動画や歌を、授業中、ことあるごとにかけていました。「洗脳されているみたい」と生徒にはいわれましたが、「それが狙いや！」と返していました。

hole からは、リズム読みテストに関しては、「3 人以上で」という条件をつけました。また、書き写しの回数も 5 回では少ない気がしてきたので、10 回に増やしました。生徒達は、書き写しや和訳プリントを終わらせてから、真剣にリズム読みの練習をしはじめたので、リズムの定着度は今ひとつでした。僕自身も、あまりリズムがとれていなくても「まあいいか」と簡単に合格させていたのも良くなかったです。ただ、暗記の時は、生徒は Turnip と同様に、カエルやノミの絵を指で押さえたり、自分で登場物のイラストをかいてそれをみたりしながら楽しく暗記にチャレンジしていました。

文法面でよかったのは2点です。1つ目は、「日本語の住所を英語で書いてみよう」という問題をやらせて、「日本語っていうのは、和歌山県和歌山市西浜3-6-1というように、上空から対象物に向かってカメラをズームして近づいていく感じ。英語は3-6-1, Nishihama, Wakayama-Shi Wakayama-Ken みたいに、対象物から上空にカメラを引いて広がっていく感じ」という説明をしたとき、多くの生徒が「お」という顔をしたことです。二つ目はtheとaの違い。There is a hole in the bottom of the sea が There is a log in the hole in the bottom of the sea.に2回目からはtheに変わるのなぜか?という問いにも、生徒は「あっ」という顔をしていました。まだまだ、リズムの定着、英語の語順の一大特徴である「後置修飾」をしっかりとつかませるところまでには至りませんでした。学年末に書いてもらった感想に「今年は前置詞というものがわかった気がする」「文の中から前置詞を見つけられるようになった」と書いている生徒が数名いました。それはhole実践の成果でしょう。

House 実践

そして、3学期。Houseを導入しました。少しやり方を変えたのは、「書き写しは1日1回。Houseの和訳プリントも1日1枚以上進んではだめ」という条件をつけました。というのは、生徒の中には、とにかく速くタスクを終わらせたくて、先に書き写しを終わらせてしまうので、歌詞や訳詞方が定着する前にタスクが終わってしまうことが見受けられたからです。それと、slow learner たちが、まるまる1時間何もしないで過ごして、しめきり直前からやっとスタートを始めるという悪習をとめる一助にもなるかと思いやってみました。もちろん、そうしても、最後までなかなか走り始めない強者たちはいましたが・・・。

Houseの実践では、課題も見つかり、逆に僕自身ができるようになったことと両方ありました。

House 実践の課題

まず、課題から。痛感したのは、生徒にとってわかりやすいプリントを作る難しさです。まずは、maltの語意の与え方です。僕は、谷川俊太郎の和訳から「麴」という意味を採用したのですが、生徒は「こうじ」をみたりきいたりしたことがないので、

This is the rat that ate the malt that lay in the house that Jack built. を訳すときに「これはジャックが建てた家においてあったネズミをたべたこうじです」

などと「こうじ」を人の名前だと思ってしまう生徒が続出しました。次のプリントからは「麦」という語意を与えました。あとは関係代名詞thatの語意の与え方です。「そしてそれは」という語意を与えたのですが、「その犬は」や「それは」という語意の方が生徒にはわかりやすかったかと思います。あとは「角」が読めない生徒がいたのも驚きでした。実物の牛などたぶん見たことがないのでなじみがないのでしょう。難しい単語はカナをふるようにしないといけないことを学びました。それと、「ジャックが家をたてた」という日本語を「これはジャックが建てた家」に書き換えさせる問題を出してみたのですが、お手上げの生徒が結構いました。次のプリントからは、穴埋め方式で書き換えさせるようにしました。

House 実践からできるようになってきたこと

リズム読み指導

逆に House の実践から、僕自身が伸びた部分があります。まず、リズム読みですが、完全にリズムに乗っていない場合、安易に合格させないことを徹底できました。おかげで、「あと 2 回やったら合格するで」「もうちょっとや」「ほとんどできてるけどもう 1 回やってみて」「ほとんどできてる。その that を弱く読めるようになったら完璧や」など、生徒のやる気をそがないでもう少し練習させる声かけがだいぶ上手になりました。そして、少しハードルが上がることで合格した生徒の達成感や自尊心が高まったみたいで、「that は弱く読むねん」「ここはこういうリズムやで」などと、まだ合格していないクラスメートにアドバイスしたり、「このところからもう 1 回読んで、せーの！」などとコーチングをしはじめる生徒も出てきました。そういう生徒の姿は、見ていて教師冥利につきます。そして、暗記の時には、Turnip や Hole と同様、イラストが大活躍していました。ただし、リズム読みテストを厳しくした分、多くの生徒は、リズム読みテストが合格する頃には、もうほとんど暗記できていました。

練習問題のスパイラルな与え方

もう一つ、見えてきたのは、スパイラルにだんだんレベルをあげていく練習問題の与え方です。House は関係代名詞節の典型教材であるかと思うのですが、実はこれはセンマルセンの典型教材でもあります。1 枚目のプリントに「ジャックが家を建てた」を英訳させる問題を出しました。次のプリントには「猫をいぬがいじめた」などと主語と目的語を入れ替えた日本語を英訳させる問題をやらせてから、3 枚目で「これは犬をつきあげた牛」など関係代名詞が入る英訳をさせ、次に「これは猫をころした犬」と「これは猫が殺した犬」の語順の違いに注目させた後、最後のプリントで総復習として、すべてのパターンの英訳で確認するというスパイラルな問題の与え方を覚えました。これにより、「この生徒はセンマルセンはつかめたな」など、どの生徒がどこで詰まっているかがよく見えるようになりました。反省としては、センマルセンからいわゆる junction に上がる階段が高く、登り切れていない生徒が見受けられていることから、もう少しその二つの違いが明らかになるクッションを入れるべきだったことです。

関係代名詞の後置修飾の英訳をする生徒に英語の語順を説明するのもうまくなりました。間違っている生徒には、「“これは角の曲がった牛が突き上げた犬です”っていう文を言っている人は、何を指さしながら言ってるの？」と聞くのが一番効果的だとわかりました。ほとんどの生徒は「犬」と答えます。「そや。日本語は指さしてる“犬”を最後にいうんやけど、英語では、指さしているやつからいうねん。まず“犬(dog)！”っていうといて、どの犬やっていうたら“それや！”って後ろから説明つけるために”that”つけるねん。」という説明をすれば、ほとんどの生徒は理解できたようです。There is a hole で学習した、「英語は狭→広のベクトルで物事をつかむ」の原理を思い出してくれた生徒がいればもっとうれしいことです。

何より House の実践を通じて、うれしかったのは、多くの生徒が、生まれて初めて、「英語って語を並べるときに何かルールがあるんや」と気づいてくれたことです。そして、ある生徒はこんなことに気づきました。

「日本語には“が”とか“を”があるけど、英語にはないんや！」

このように、英語に何かしらのルールがあることに気づいた生徒達は、次に普段何も意識しないで使っている日本語も、あるルールに基づいて構成されていることを意識し始めるのです。これまで何の武器ももたず、英語と対峙して、「英語らわからん！」と愚痴るだけだった生徒達が、「英語をわかるために、なにか手がかりとなる手段がある」ことを認識し始めたということです。これはとてつもなく大きな進歩です。

教科書教材の位置づけ

もう一つ、見えてきたのは、教科書の英文を使う学習の位置づけです。基本 3 教材が、英語の語順の幹である「せんまるせん」「後置修飾」「前置詞句」の 3 つの確認であるとしたら、教科書和訳プリントの位置づけは、①その3つのルールが身についたかを別の文章で確認すること②その3つ以外の+アルファの文法項目を一つ付け足すこと(今回は準動詞のNexus構文を+アルファの文法項目に設定しました)③穴埋め語順訳から立ち止まり訳にスムーズにいける日本語力をつけること④単語の意味と記号さえあればどんな英文でも意味がとれることがわかり、英文をたくさん読む多読の世界へ生徒を誘うこと の 4 つにあることが見えてきました。よく寺島先生は「教科書を副教材的に使うこと」をアドバイスくださいますが、その意味は、こういうことだったのかなと今は思っています。学年末テストの結果を見てみると、今回の教科書と訳プリントでは、生徒はまだまだ力をつけ切れていなかったのですが、教科書の英文の使い方は、はっきりと見えてきました。

その他の教材

その他のタスクである「FLT とのトーク」「振り返り作文」については、良かったです。とくに「FLT とのトーク」は、FLT の先生の人柄の良さもあり、生徒達はとても楽しみにしていました。FLT の先生を取り囲んで、談笑している姿をよく目にしました。「英語の授業のおかげで、バイト先や町中で外国の人に話しかけられたとき、逃げずに対応できるようになった」という感想をよくみるようになりました。言語や見た目で人を判断しないでこちらから踏み込んでいく感覚を育ててくれているのかなとうれしく思います。反省は一つ。トークの後、生徒に「どんな話をしたか」「トーク中、英語で言いたかったのにいえなかったことはなかったか」などを振り返るシートを書かせるべきだということです。そうすればもっと定着度は上がると思います。

振り返り作文も、生徒自身が自分の学習や成長を振り返るいい機会になっていると思います。こちらにも、生徒の思いがよくわかるし授業改善のいい材料になります。なかなかかけない生徒については、先日寺島先生にアドバイスをいただいたように「作文の手引き」を渡すようにしたいと思います。

2.2 成績の付け方

拙論「工業高校における効果的な評価方法の模索」で書いたとおり、「闇の中の平常点」と「妥当性も客観性も薄いのに一回ぼっきりしか行われぬ定期テストの点数」でつける評点方法では、生徒の意欲はあがりません。色々模索しましたが、今は現行の「定期テスト 50 点 + 必修タスク点 30 点 + ボーナス無制限」という配点がベストだと思います。うちの学校では、80 点以上が評定「5」となります。5 を取るには、ボーナスをかなりこなしておかないと難しいですが、家庭学習や自学自習の習慣をつけるには、いい刺激になっているかと思います。今回、3 学期の成績が伸びきらず、悔いを残した生徒も多かったようで、すでに、来年度の 1 学期の授業を始めていますが、「春休みの宿題もボーナス点にするよ」という指示に対する生徒たちの反応は熱いです。

さらに、まだまだ授業時間内に、必修タスクをおわらせることができない、「計画力」のない生徒がいます。授業中に自分で自分の「やる気スイッチ」をなかなか押せない生徒もいます。授業中にできなかった人は、何回も何回も呼び出してやらせます。今回も、時間はかかりましたが、最終すべての生徒が必修タスクを突破できました。ずっとこのままかもしれませんが、生徒の成長を信じて、

叱ったり褒めたりしながら、なんとか「集中力、持続力、計画力」をつけるようにサポートしづけたいと思います。

教員対生徒という関係で、むりやりやらせることも、今のおとなしい生徒達には可能です。しかし、それでは、「卒業した後も、自分で学習を続ける力」はつけないまま、終わってしまうでしょう。「僕にもわかる！」「やればできる！」という気持ちで、成績や単位習得に関係なく、学習を続ける支えになることは、今、授業内でプリントに取り組む生徒達の姿を見れば、一目瞭然です。卒業するまでに、一人でも多くの生徒に学ぶ楽しさ、わかる喜びを伝えること、それが僕にとっての「幹」です。

2.3 クラス間の差

同じ学校の同じ2年生とはいえ、入試の段階で、科間には、歴然とした学力差があります。当初は、3クラスとも、同じタスクを課し、同じテスト問題を採用していたのですが、とくに一番学力が低いクラスは、生徒のテストの出来がまったくでました。そこで2学期の期末テストからは、一番学力の低いクラスだけ、問題を変えました。具体的には、英訳や和訳をするときにヒントをたくさん与えたり、自由英作文の問題を出題しないようにしました。それでも、今回の学年末テストの結果をみると、まだまだ、このクラスの出来は悪いです。授業中、せっかく自分で計画を立てて、まじめに取り組む生徒たちが、「やった！英語の力が伸びている！」と思えるテストを作らないと、本当の学びにはつながりません。

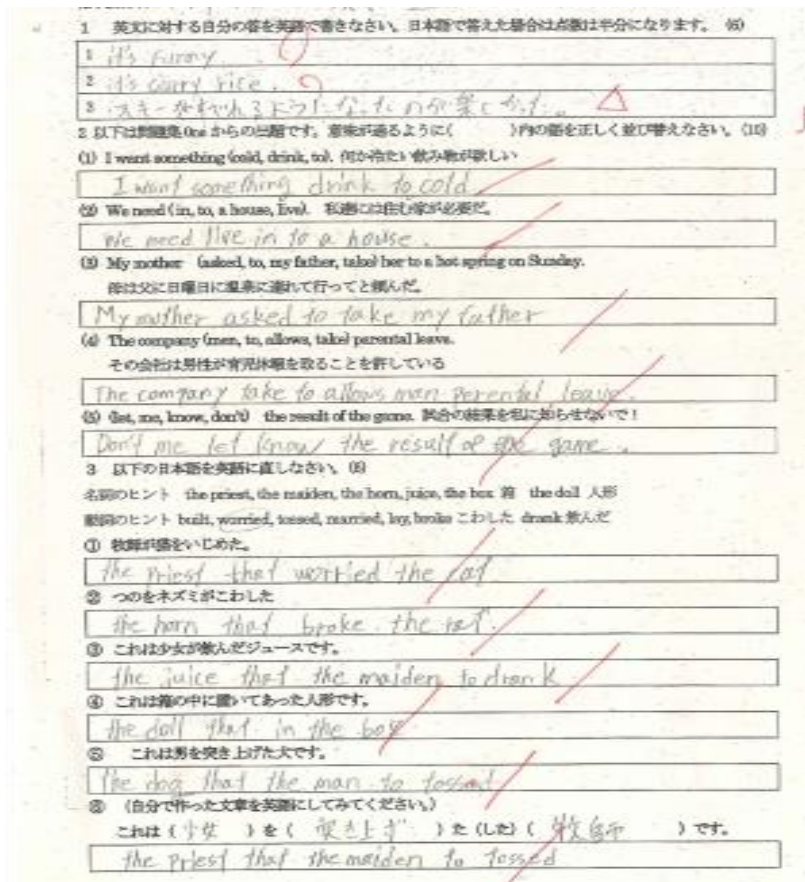
このクラスの生徒と他のクラスの生徒とを比べて決定的な違いは、日本語力と目の力です。全体で大事なことを連絡しても、指示が通らない、穴埋め語順訳に書き込んだ日本語を柔軟に変えられないので立ち止まり訳できない、ヒントは書いてあるのにそれを探せない、そしてとにかくプリントを1枚仕上げる時間や書写を1回するのにかかる時間が遅いことです。

このクラスの生徒は、今のところ「英語の授業は、自分のペースでやれるからやりやすい」「タスクさえやりとげれば赤点がないからいい」「先生、たのむから来年ももって」と、僕の授業スタイルを受け入れてくれています。だからこそ、卒業した後も自学自習を続けられる自信と楽しみを身につけてもらいたいです。来年度、授業プリントのわかりやすさ、取り組みやすさ、つまっている生徒へのわかりやすいアドバイス、テストの難易度の設定を、のこり二クラスよりも一時間か二時間かけて取り組みたいと思っています。もちろん、のこり二クラスにもこのクラスにもいる、Fast Learners たちを退屈させないボーナス読み物や、検定試験への挑戦の誘いは忘れずに。

ここまで、今年度1年間の、2年生のクラスの授業について振り返ってきました。次節では、2月に行われた学年末テストの結果から、僕自身の授業の進め方および彼らの学びの到達点と課題点を明らかにしていきたいと思います。

3 学年末テストの結果の省察

ここからは、2月に行われた学年末テストについて、具体的に、僕がどんな問題を出し、その結果がどうだったかを省察していきます。成績の付け方は、平常点30点、テスト50点、ボーナスポイント無制限ですので、テストの点数は50点満点です。テストの大問は7問ありました。まずは、1番から3番までです。



第1問は、学期中に行った「FLTトーク」からの出題。修学旅行について、僕が英語で聞いた質問に対して、英語で自分の答えを書く問題です。第2問は、学年で統一した文法問題集を持たせていて、教科の話合いで、その問題集から定期テストごとに範囲を決めて、10点程度出題することが決まっているので、そこからの出題です。今回の範囲は「不定詞」でした。第3問が、The House の和訳プリントで学習した英語の語順が身についたかを問う問題です。

各問題の出題意図について説明します。第1問については、定期テストでいつも出すようにしています。What did you buy for the souvenir? や How was the school trip? など疑問詞をしっかり聞き取れるかと、自分の言いたいことをどれだけ英語で書けるかを問いたい問題です。毎回やっているのですが、生徒が自分の成長を感じて欲しいのと、表現する楽しさを感じて欲しいために出題しています。英語で答えられるかは別にして、回を重ねるごとに、生徒達のできも良くなってきていると思います。

第2問の不定詞の問題ですが、今回、教科書マラソンの「+1文法事項」を準動詞の NEXUS 構造に設定していたので、(3)(4)(5)は、生徒達にできていて欲しかった問題でした。しかし、テスト前に問題集をしっかり勉強して答えを丸暗記していた生徒以外のできは、悪かったです。この問題の意図は、語順がわかっているかなので、単語の意味のヒントを与えるべきだったと反省しています。

第 3 問が、今回一番、僕が出来を気にしていたところでした。ここに載せてある生徒は、残念ながら全問まちがっています。しかし、どこでまちがったか、どこでつまずいているかは、一目瞭然です。

1 は、へんなところに that が入っています。この生徒は、「牧師が猫をいじめた」と「牧師がいじめた猫」つまり、junction と sentence の区別ができていないことがわかります。しかし、名詞＋動詞＋名詞 という順番はわかっています。それがわかっているとすることは、動詞と名詞が区別できているということです。

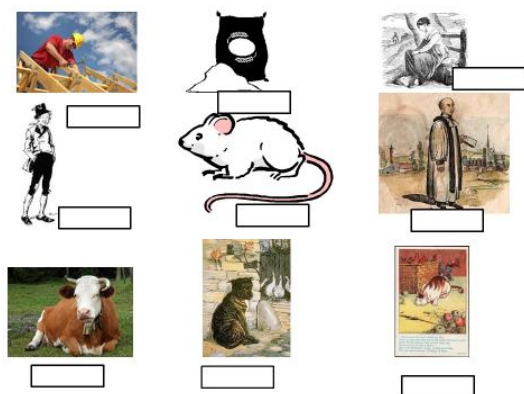
2 は、センマルセンになっていますが、主語と目的語の順番が入れ替わっています。この生徒だけではなく、「名詞」と「主語」「目的語」の区別があやふやな生徒はまだ結構います。

345 は、this is が抜けていますが、「英語は先に指をさして後ろから説明が来る」ということはこの生徒はわかっています。ただ 5 にあるように関係代名詞 that の以下の語順も「主語＋動詞＋目的語」になることがまだあやふやだということがわかります。

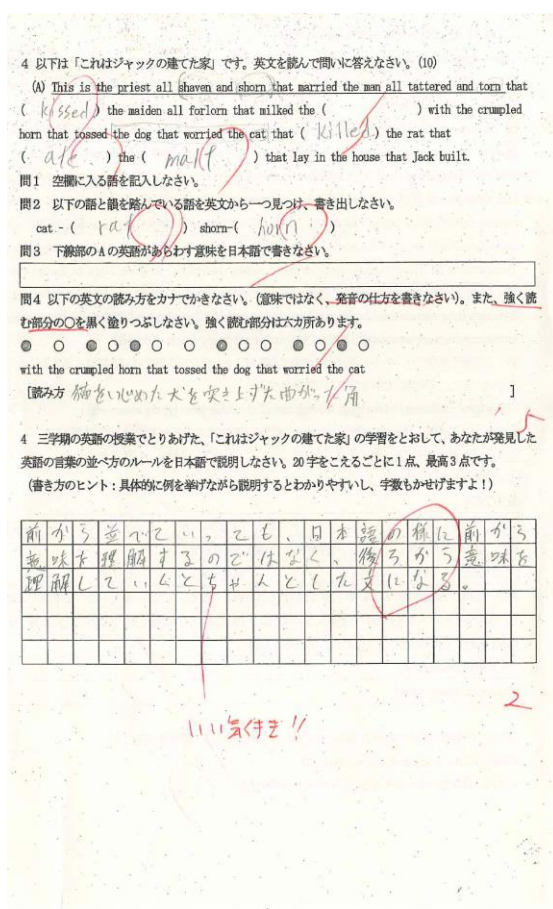
第 3 問を採点している内に、僕は、以下のような表を書いて、一人一人がどこでつまずいているか、何は体得しているかを表にしてみました。

生徒名	センマルセン	主語と目的語	先指さして説明は後	関係題名 that が書けている	関係代名詞後の S,O の順番	リズム読み	メタ言語能力	英作の表現力
A 君	○	△	○	○	△	×	△	×
B 君	○	○	○	×	○	○	○	△

例に出している生徒は、上の表で言うと A 君になります。A 君がしなかったけれど、他の多くの生徒がした間違いは This is the dog tossed the man という語順は、完璧なのに that が抜ける間違いです。これは、リズム読みをするときに、「that をいちいちきちんと発音したら、リズムにのれやんから、いわんくらいでちょうどええで！」という指導をしたからでした。(今度 house をやるときは、リズム読みの時は、that はほぼ無視しろ！という指導でいいけど、暗記の時は、牛とか娘の絵を指さしながら、「絵が変わるとき that いうのわすれやんといてよ！」とう指導をすることにします。ちなみに下に、今回の授業で僕が生徒に渡した絵をつけておきます)。



続いて、第4問と第5問を見ていきます。



第4問の穴埋めは、10回も書写したし、暗記テストも合格したのだから、できるだろう?と思っていたら大間違いでした。やはり「暗写」もさせるべきだったかな?それと、学習したプリントをきちんと生徒達に保管させるべきだったかな?テスト前にもう一度その学期に学習した内容を振り返る機会を設けるべきだったと反省しています。強く読むところを黒く塗りつぶさせる問題は、毎回出題しています。残念ながら、この生徒は間違っていました。この問題の正解率は、定期テストごとにどんどん上がってきてうれしい限りです。

そして第5問。いわゆる「メタ言語能力」や「生徒が新しい学習内容を自分の言葉で自分の中に入れることができただか」を問う問題です。書いている内容が正しいかどうかは問わず、とにかく指定の字数をかけていたら点数をあげています。このような記述式問題は毎回出題しています。一人一人の生徒が、学習を深めるごとに、どう解答が発展していくか、いずれ研究してみようと思っています。

この生徒の解答からは、まだまだ、彼の中で、英語の仕組みはとらえ切れていないことがよくわかります。いくつか他の生徒の文も紹介してみます。

英語	ア	ン	本	は	ジャ	ック	の	建	て	家	を	建
く	ン	”	I	h	i	s	i	s	t	h	e	t
ナ	h	a	n	a	c	k	b	i	i	”	と	な
り	日	本	語	と	違	う	て	初	め	と	名	詞
か	ら	は	具	体	的	な	差	異	が	あ	る	と
ら	は	動	詞	も	日	本	語	よ	り	早	く	ま

読	み	方	が	ま	”	最	初	の	読	み	書	”	”	日	け	文	の	最	
後	を	読	み	最	後	は	真	人	中	の	読	み	書	”	”	日	け	文	の
は	読	み	方	が	ま	”	最	初	の	読	み	書	”	”	日	け	文	の	
最	初	の	読	み	書	”	”	日	け	文	の	最	初	の	読	み	書	”	
み	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	

英	語	の	言	葉	の	並	べ	方	の	ル	ー	ル	は	主	語	が	後	ろ	の
お	に	く	る	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”
い	う	日	本	語	を	英	語	に	あ	る	”	”	”	”	”	”	”	”	”
り	主	語	は	後	ろ	に	あ	る	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”

英	語	の	字	を	付	け	足	し	て	修	飾	で	”	”	”	”	”	”	”
い	た	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”
た	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”
と	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”
英	語	と	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”
も	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”

るに付け足すことかできる。この文の後ろに「ネス」を殺したと付けた場合も然りである。

3
b
20 2017/04/28/2117
安心す!!!

生徒の文章を分析すれば、一人一人の生徒の課題や、クラス全体として支援が足りなかった部分が明らかになってきます。このように蓄積していったデータを生徒と共有しながら、到達点と課題点を話し合う時間が大事だと思います。ですので、来シーズンは、テスト後の初授業は一人一人の面談にあてることができたらいいなと思っています。

続いて第6問と第7問です。

5 英文を読んで以下の問いに答えなさい。(10)

There are so many restaurants [in Japan], 2 but one [of them] is quite special. 3 It is called Mago no mise, or Grandchildren's Restaurant. 4 It is run [by students] [of Ohka Senior High School] [in Taki, Mie Prefecture]. 5 They are [in charge] [of cooking, serving and all the other jobs] [at the restaurant]. 6 [In order to] open the restaurant [on weekends and holidays]. 7 the students spend a lot of time preparing [on weekdays]. 8 Some students get up very early [to go] [to the local fish market] and buy fresh fish [before they] go [to school]. 9 [After school], others meet local farmers and ask them [to sell] their vegetables [to the restaurant]. 10 The restaurant is popular [among local people] [of all ages]. 11 The customers enjoy the meals made [by the students]. 12 [On the other hand], the students learn many important things, [such as hospitality and manners]. 14 "The customers' smile always (happy, us, makes) and we (enjoy, to, them, want) 15 I (want) [to continue] (cooking) Japanese food all my life!" 16 (said) one [of the students]. 17 [Through their experiences] [at Mago no mise], the students have started thinking [about their future careers more seriously]. 18 What (do you want) [to do] [in the future]?

問1 空欄を埋めて以下の文の語順訳(順番は英語のまま、語句の意味だけ日本語にすること)をしなさい。また、文全体の意味を日本語で書きなさい。

They are [in charge] [of cooking, serving and all the other jobs] [at the restaurant]
 ヒント in~の中に charge: 責任 serving 接待 all すべて other 別の job(s) 仕事
 かわら [ある]~の中に [責任]]への 調理+接待の仕事
 [~において] [スタッフ]

英文の意味

かわらば レストランにおいて調理と接待の仕事の責任がある

問2 以下のものが指しているものを具体的に日本語で説明しなさい。

2 of them restaurants 18 of you seriously

問3 「お客様の笑顔をみているといつも僕たちはうれしくなる。だから、僕たちは、お客さんに楽しんでほしいんです」という意味になるように 14 の文の (happy, us, makes) と (enjoy, to, them, want) を意味が通るように正しく並び替へなさい。

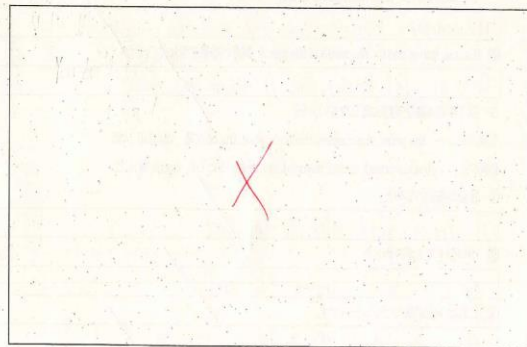
(happy, us, makes) X
 (enjoy, to, them, want) X

問4 以下の質問の答えがわかる文章を英文からみつけてその文の番号を書きなさい。

1 What do the students do on weekdays? [6 と 7]
 2 この文章を書いた人が考えるまごの店の生徒達の成長 [11]

6 twitter を通じて知り合ったアフリカのケニア人の、ウフル(Uhuru)君(日本語は苦手ですが、英語はできます。スキーはしたことはありません)。にメールを書きます。あなたは修学旅行の思い出をかねに伝えて、来年は長野と一緒にスキーを楽しもうと誘おうとしています。その内容を25語以上の英単語を使って英語で書きなさい。不必要に同じ単語を繰り返す場合は、その単語は1語としかカウントしません。(5) 単語のヒント school trip, ski, snow, fun, let's, next year, winter, Nagano, together, beautiful, mountain, coach, enjoyed, food,

	A 2点	B [1点]	C [0.5点]
分量	45語以上	35語以上	25語以上
文法・つづり字の正しさ	間違いがほぼない	少しある	間違いが多い
読得力	感想が十分あり、相手もきっちり誘っていて、「会話の目的」が十分果たされている。	感想は十分伝わるが、相手に「一緒にこう!」という気持ちを伝え切れていない	相手に「一緒にいきたい!」という意思がほとんど伝わらない内容だ。



テストの点数	必修タスク突破点	ボーナス点	最終成績
18	20		4

第6問は、教科書の本文からの出題です。問1は、ヒントを見ながらきちんと語順訳ができるかという「目の力」と、語順訳をわかりやすい日本語にできるかという「日本語力」を問う問題です。ここで、先述したクラス間の学力差が大きく出ました。一番低学力のクラスは、できない生徒がおおかったです。まだまだ、和訳プリントをたくさんやり、僕の方で支援もしながら「目の力」と「日本語力」を身につけるようにしないとイケないなど痛感しました。残りの2クラスについては、上の生徒のようにほとんどの生徒が、突破していたので安心しました。問3の結果が、がっかりでした。Nexusの構造については、「英語は主語動詞主語動詞がペアでならぶんやで!」と口酸っぱく言ってきたつもりでしたが、先ほどの第3問で、ほとんどの生徒がセンマルセンを体得していた(つまり、動詞と名詞の区別ができるようになっていた)手応えがあったのですが、ここは、まだまだ定着していませんでした。次学年からは、「動詞の数」に着目させることで、Nexus や接続詞のある複文の構

造 を 定 着 さ せ た い と 思 い ま す 。

5 英文を讀んで以下の問いに答えなさい。(10)
 There are so many restaurants [in Japan], 2 but one [of them] is quite special. 3 It is called Magono-mise, or Grandchildren's Restaurant. 4 It is run [by students] [of Ohka Senior High School] [in Taki, Mie Prefecture]. 5 They are [in charge] [of cooking, serving and all the other jobs] [at the restaurant]. 6 [In order to open the restaurant] [on weekends and holidays] 7 the students spend a lot of time preparing [on weekdays]. 8 Some students get up very early [to go] [to the local fish market] and buy fresh fish [before they go] [to school]. 9 [After school], others need local farmers and ask them [to sell] their vegetables [to the restaurant]. 10 The restaurant is popular [among local people] [of all ages]. 11 The customers enjoy the meals made [by the students]. 12 [On the other hand], the students learn many important things, [such as hospitality and manners]. 14 "The customers smile always (happy, us, makes) and we (enjoy, to, them, want) 15 I want [to continue] cooking Japanese food all my life" 16 said one [of the students]. 17 [Through their experiences] [at Magono-mise], the students have started thinking [about their future careers more seriously]. 18 What do you want [to do] [in the future]?

問1 空欄を埋めて以下の文の語順訳(順番は英語のまま、語句の意味だけ日本語にすること)をしなさい。また、文全体の意味を日本語で書きなさい。

They are [in charge] [of cooking, serving and all the other jobs] [at the restaurant]

ヒント in~の中に charge 責任 serving 接待 all すべて other 別の job(s) 仕事
 かれら ある ~の中に 責任 11 ~の 調理と接待の 仕事
 [~において 1st]

英文の意味

かれらはレストランにおいて調理と接待のすべての仕事の責任がある。

問2 以下のものが指しているものを具体的に日本語で説明しなさい。

2 of them restaurants 18 of you seriously

問3 「お客さんの笑顔をみているといつも僕たちはうれしくなる。だから、僕たちは、お客さんに楽しんでもらいたいです」という意味になるように 14 の文の (happy, us, makes) と (enjoy, to, them, want) を意味が通るように正しく並び替えなさい。

(happy, us, makes) X
 (enjoy, to, them, want) X

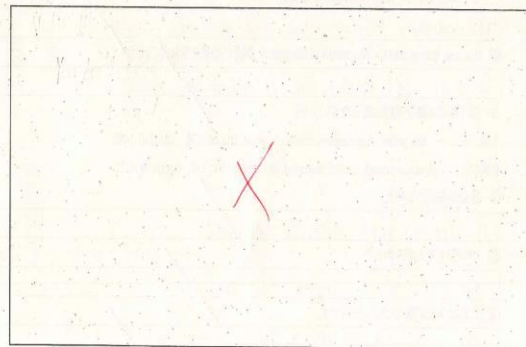
問4 以下の質問の答えがわかる文章を英文からみつけてその文の番号を書きなさい。

- 1 What do the students do on weekdays? [6 と 7]
 2 この文章を書いた人が考えるまご店の生徒達の成長 [11]

6 twitter を通じて知り合ったアフリカのケニア人の、ウフル(Uhuru)君(日本語は苦手ですが、英語はできます。スキーはしたことはありません)。にメールを書きます。あなたは修学旅行の思い出をかれに伝えて、来年は長野と一緒にスキーを楽しもうと誘おうとしています。その内容を25語以上の英単語を使って英語で書きなさい。不必要に同じ単語を繰り返す場合は、その単語は1語としカウントしません。(5)

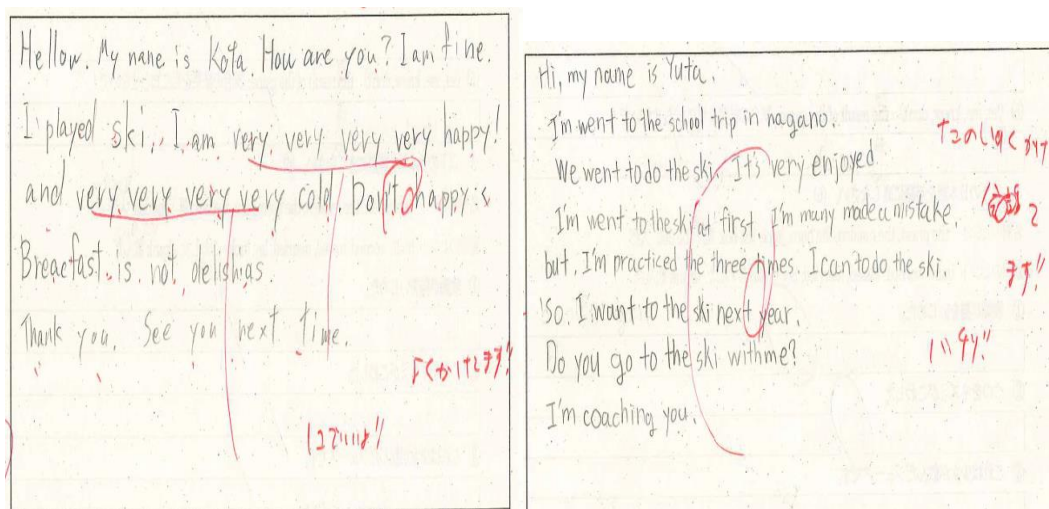
単語のヒント school trip, ski, snow, fun, let's, next year, winter, Nagano, together, beautiful, mountain, coach, enjoyed, food,

	A [2点]	B [1点]	C [0.5点]
分量	45語以上	35語以上	25語以上
文法・つづり字の正しさ	間違いがほぼない	少しある	間違いが多い
読得力	感想が十分あり、相手もきっちり誘っていて、「会話の目的」が十分果たしている。	感想は十分伝わるが、相手に「一緒に行こう!」という気持ちを伝えられていない	相手に「一緒にいきたい」という意思がほとんど伝わらない内容だ。



テストの点数	必修タスク突破点	ボーナス点	最終成績
18	20		4

第7問は、生徒の力試し、そして英語で表現する楽しさを感じてもらうために、毎回ほぼ同じ形式で出題しています。初めは、白紙でお手上げだった生徒も多かったですが、回を追うごとに、「爪痕を残せる」生徒が増えてきてうれしい限りです。これも「FLT トークの成果かな?」と思います。細かいミスはあまり気にせず、伝えたい気持ちが伝わることを重視して採点しています。英語の仕組みが身につくのと、この自由英作文での進歩が、リンクするかどうか、これから先追究したいテーマです。この生徒は残念ながら白紙でしたので、爪痕を残した生徒の作品をいくつか紹介します。



教師生活 25 年にして、今回のテスト返却時ほど楽しいときはありませんでした。テストで何を問うかが明らかなので、一人一人に「君は今回の授業で身につけて欲しかった英語の語順のルールはほぼ身につけている」「君は動詞が真ん中に来ることは分かってきたな、次は主語をきちんと意識していこう」「関係代名詞の That が抜けてるだけやから、英語は家が先来て、あとからジャックが建てたっていう説明が来ることはわかってるから大丈夫」「自由英作文書けるようになってきたな。次は6点満点目指してよ！」などと具体的な声掛けが出来たのが自分でもびっくりしました。中には「先生、そんな解説いらんから、点数だけ分かったらええから」みたいな生徒もいないわけじゃないけど、大多数の生徒は、僕の評価を受け止めてくれていたようで、「期待してるで、まだまだ伸びるよ」とか「だいぶん伸びてきたから、英検チャレンジしてみたら？」などと言うといい顔を見せてくれていました。

テストで何点とったかなどは、本当にどうでもいいことだとわかりました。どこまで到達していて、次はどの階段が待っているのかが、教員にも生徒自身にも見えたらそれでいい。今にしてやっと、各タームでの目標の目当てがおぼろげながら見通せるようになってきた気がしました。

先日、『教えることの復権』という本を読みました。大村はまさんという、中学校の国語教育で「単元学習」という理念と方法で生徒を深い学びに導いた教員の実践を、彼女の教え子で、教育研究家の荻谷剛彦氏の妻である荻谷夏子氏が振り返っている本です。大村さんは、テストに関してこういう言葉を残しています。

「この病気をもっているのは、クラスの誰と誰だ、それを診断するために問題を作っている」(p112)。

テストは、成績の順番をつけるためではない、ということは僕自身ずっと自分に言い聞かせてきました。それは、そうなのですが、ではテストは何のためにやっているのか、という自分への追い込みが希薄でした。この単元は、生徒にどんな力をつけるためかという見通し。どの生徒が、どこまでそれを習得できたかという見極め。大村さんは、授業しているすべての生徒について、「積極的な発言」「無駄な発言の多さ」など項目別にチェックする表を作っていたようです(p91)。僕自身も、「リズム読みが一人でもできる」「英語の語順のうちせんまるせんはわかっている」「集中力がある」などと、授業で一人一人がきちんと力をつけているか、ある程度の見極めはできているかと思うのです。

が、もっともっと、一人一人細かく把握していかないといけません。日頃の一对一のやりとりでもかなりの部分を把握できますが、さらに、「本当にこの単元でどのくらい力がついたか？」を問う問題作り、さらに、生徒が残す「振り返り用紙に書いたコメント」「生徒が自分の言葉で説明する英文法のルール」などのエビデンスをきっちり見つめること、さらに、その情報を生徒に返して、生徒の自己評価を促すこともしていかないといけないなど痛感しました。

ここまで、学年末テストの位置づけを考えてきました。次節は、今年度の反省を受けて、来年度はどのような授業計画を立てるかを考察していきたいと思います。

4 2018 年度の授業をどう組み立てるか

これまでの考察をうけて、来年度の授業構想を練ってみました。それが、以下の表です。

	新1・2年生	新3年生
1 学期前半	<ul style="list-style-type: none"> ・There is a hole 和訳プリント、暗記、リズム読み、書写 ・教科書和訳プリント 	<ul style="list-style-type: none"> ・英訳版ノミのピコ和訳プリントマラソン ・教科書の和訳プリント ・A whole new world 書写、暗記、リズム読み
1 学期後半	<ul style="list-style-type: none"> ・This is the house that Jack built 和訳プリント、暗記、リズム読み、書写 ・教科書和訳プリント 	<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチを使った表現読みと構造読み ・教科書の和訳プリント ・洋楽の書写、暗記、リズム読み
2 学期前半	<ul style="list-style-type: none"> ・The big turnip 和訳プリント、暗記、リズム読み、書写 ・教科書和訳プリント 	<ul style="list-style-type: none"> ・映画”Les Miserables 鑑賞 ・ミゼラブル和訳プリント ・Look down の書写、暗記、リズム読み
2 学期後半	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の和訳プリント ・洋楽の書写、暗記、リズム読み 	<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチを使った表現読みと構造読み ・教科書の和訳プリント ・洋楽の書写、暗記、リズム読み
3 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の和訳プリント ・洋楽の書写、暗記、リズム読み ・スピーチを使った表現読みと構造読み 	生徒が自分で自分のすべきことをきめるプロジェクト型学習

3 年生に関しては、「ノミのピコ」で 3 つの法則のだめ押しをやったあと、+アルファの文法を時間の許す限り入れていこうと思っています。そして、今年度の実践でできなかった

- ① 文章の構造を読み取る
- ② 教員の前だけでなく、クラスメート全員の前で発表する表現読み

- ③ 自己の学習の振り返り作文の量を増やすことと英語でも書かせるようにもっていく
- ④ ポートフォリオ評価
- ⑤ マラソンではなく、クラスや班で話し合う授業

なども、無理をしない範囲で追究していきたいです。そして、はじめて出会うことになる1年生や2年生には、「一文一文のよみとり」「リズムの等時性」をできるだけ早く体得させて、上記の5つを目指して行きたいです。基本3教材は、2回目なので、今年の自分を超越える実践ができるように周到に準備をしようと思っています。そこさえ間違わなければ、その後の彼らのステップはきっと軽くなることでしょうから。

5 終わりに～本質を大事にするということ～

先述の大村さんの本を読んでびっくりしたのは、「授業中の生徒がかわいいと思ったことなど一度もない(p89)」ということでした。僕は、常々どうやったら生徒に「先生のおかげで英語が好きになった、ありがとう」、といってもらふことかばかり考えています。大村さんを突き動かしていたのは、そんなあまच्छょろい感傷ではありませんでした。それは、戦前の教育を「戦争の後押しをしていた」(p138)と愕然と受け止めた上での、「民主国家の建設のほかに日本が再生することができない」(p138)という信念のもと身を捨てた覚悟でした。そして、彼女には、民主国家建設のために、国語教育で追求すべき本質は、「自分の思っていることがそのまま相手に伝わる力」(p72)をのぼすことだとはっきりと見えていたのです。その力がつかない限りは、お互いが意見を交流し合う民主国家にはならないという使命感が彼女には、強くありました。

僕が最近感じているのは、「本質なんてそんなたくさんない」という思いです。英語の音声は、等間隔の強弱リズムだけ。英語の語順は、「センマルセン。後置修飾。前置詞句」の3つだけ。それを、ど真ん中にすえて、他の新しい内容を少しずつ加えながら、スパイラルに習得を繰り返すことで、定着をはかることだけ考えればいいのかと。

そして、言語教育としての英語教育で身につけるべきは、大村さんと同じで「思っていることをそのまま言う、伝えたいことを書く」だけではないかと。そして、学校の教科教育を初めとする社会教育の学びの本質は「平和で民主的な社会を作る一員の育成」なのではないかと。

だから、英語の授業では、あっちこっちうろろうろして結局何も残らない授業をするのではなく、どうすれば目の前の生徒に一番伝わりやすい切り口で、飽きないようにあの手この手でスパイラルに繰り返して生徒を「本質」に近づけていくことだけ考えればいいのか。そのある程度ひとまとまりの学習を、単元という形で区切り、その単元で追求する本質は何かを理解しておくこと、それが、大村さんの言う「単元学習」なのではないのでしょうか。

寺島メソッドと出会って、「本質」に近づく武器をもらい、実践を積み重ねる中で僕のその「武器」の使い方が、うまくなっている実感が持っています。「自分が死ぬときに、自分が生まれてきたときより、すこしだけ、みんなにとってから良い社会になっていること」を目指して、日々、生徒達と前に進んでいきたいです。

6 生徒の声

最後に、2年生が最後に残してくれた作文のいくつかを紹介します。

「この英語の授業をとおしてわかったことは、発音や語順が日本語とは全くちがうくなるということです。この1年で一番最初にやったことは、We will rock you を覚えて歌い、2回目は民衆の歌を覚えて歌いました。そして、3回目はジャックの歌を覚えて歌うことをしました。We will rock you はリズムを覚えるのが難しく時間がかかりました。その間に積み重ね歌もあつたけどそれはわりと覚えやすく歌いやすかったです。そして最後のジャックの歌が一番難しいと思いました。この他にもダストークでいろいろな事を話しました。いろいろなプリントもして英語の文法を理解することもできました。ダストークの会話は時々わからない単語もでてきたけど、ほんやくしてくれてわかるようになりました」(化学木村君)

「1年間の英語で学んだ事は日本語と英語とでは語順などが違っているということです。たとえば「たけしがりんごをたべた」のように日本語では動詞の食べたが最後に来ますが、英語だと Takeshi ate apple のように英語は日本語とは違って、主語の次に動詞が来るという形になっている。自分はあまり英語が得意ではないので日本語と英語の違いがいまいちよくわからないことがよくある。でもやっていけば、前述で述べたことのようにわかることもある。だから英語に限ったことじゃないけど、仕組みを理解できればそれほど難しいことじゃないのかもしれない。なので、残り1年間、少しでも英語を理解できるように頑張りたいです。」(創造 廣田君)

「ぼくは、今回の英語の授業を振り返って思ったことは、英語がだんだん読めるようになってきました。はじめは、まごまらそんをやっていって、わからないところは友達にきいたり、先生にきいたりして、だんだんわかるようになってきました。次にジャックの写しをやりました。ジャックの写し10回は、もう一気にやりました。はじめに5回ぐらいやって、次の時間で終わらしました。ジャックマラソンもしました。ジャックマラソンは、まごまらそんでこつをつかんだので結構はやくおわりました。リズム読みは何人かでした。失敗も何回かしたけど、なんとかできました。暗記も失敗したけど、できました。次にダストークでいろいろ聞かれて、あんまりわからなかったけど、ちょっとだけ、言っていることがわかりました。テストもがんばる。」(土木 佐々木君)

「今年1年の英語を振り返っての事を書きたいと思います。今年は昨年と同じでマラソンプリントを進めていくというやり方でした。でも今年は英語の並べ方などをきっちり教えてくれるマラソンになっていました。今年はこのマラソンプリントのおかげで英語の並べ方をきっちりわかるようになりました。後はずっと続けていた写しのおかげで単語を速くかけるようになりました。他には、前置詞を答えるなどの問題のおかげで、前置詞動詞名詞などいろいろな区別もわかるようになりました。もし来年も同じような感じであればとてもうれしいです。英語力はみにつくし集中力もつくので一石二鳥でとてもよいと思います。これからももっと自分の英語力を高めてテストでも点数アップを狙いたいと思います。英語はこれからの将来絶対必要になってくるので、これからもずっと使っていけるように忘れずにしたいと思います。後は、英語で表記されていることが読めれば、もっと世界が広がると思うのでしっかり覚えたいです。」(土木 漸井君)

「今回の授業では、ダストーク2回とジャックプリント7枚とまごの店プリント5枚をしました。まごの店プリントは横のヒントを見て終わらせました。ジャックマラソンも1から6までのプリントは横のヒント

を見てすぐできましたが、7 だけは自分で考えて文章を作らないといけなかったのが、少し難しかったです。でも、1 番難しかったのはジャックのリズム読みと暗記でした。リズム読みは強く読むところを手をたたいてリズム読みをしました。暗記はほとんど一人でできましたが、少しヒントをもらってしまっただけ、きちんとできて良かったです。3 年生になっても英語はあるので、しっかり自分のペースががんばろうと思います。」(土木 岡部君)

「今年の英語の授業で印象に残っていることは、文化祭のダストークです。理由は、やきとりのことを ファイヤーチキンといったり、その他にも色々言い間違い？があつて面白かったからです。その他に印象に残っていることは、英語の歌です。A hole in the bottom of the sea と This is the house that Jack built で印象に残っている理由は、歌詞がどんどん足されていって覚えやすいし、リズムがとりやすく、中毒性のあるメロディで頭から離れないからです。今年は補習になってしまって、ボーナスもほとんどできなかったのが、来年は早く終わらせてボーナスをできるぐらいにしていきたいです。」(創造 寺井もとき君)

「今年1年間の英語の授業を通して感じたことがいくつかあります。一つ目は英語は日本語と文の構成がまったく違っていることを学びました。日本語で、主語＋修飾語＋動詞という文は、英語だと主語＋動詞＋修飾語というように主語のすぐ後に動詞が来るのがほとんどだと思いました。また、日本語の住所が日本の和歌山の和歌山市の・・・というように大きな所から小さいところになるように書きますが、英語だと逆に、何号、何番地、和歌山市・・・というように小さなところから大きくなるように書くことも学びました。二つ目は、英語の単語だけ覚えていても意味のある文にするのは難しいと感じました。単語を覚えるのに精一杯なのに、訳するのは順番も絡んで大変でした。この 1 年の英語の授業で、僕は英語の知識だけでなく、自分から行動する力も身につけることができたと思います。」(化学 大平君)

8 後記

このレポートを提出した後、寺島先生からお電話をいただきました。お忙しい中、時間を取っていただき、先生がお疲れになるほど、熱くお話いただき本当にありがとうございました。授業の改善点や、英語の構造に対する僕の認識の甘さに関して、非常に貴重なアドバイスをたくさんいただきました。どのアドバイスも、すべて僕の今の授業実践の上手くないところの核心をつくものでした。以下、「教科書の使い方」「テストで問うべきもの」「生徒集団の前と後ろをつかむ」の3点で、先生からのアドバイスを反芻していきたいと思います。

まず、教科書の使い方です。教科書の英文を学習するのは、「生徒達が、貧しい家計の中で購入した教科書もやらない」という使命感だけでした。しかし、考えてみたら、本当に生徒達を自分で考えられる賢い主権者に育てる「最短距離」こそ優先されるべきです。週2回しかない英語の授業で、「文の読み」はとっとと卒業させて「文章の読み」「構造読み」「表現読み」の世界につれていけるかが勝負なのです。ですので、寺島先生のアドバイスの通り、基本3教材で「前置詞句による後置修飾」「関係詞節による後置修飾」「せんまるせん」を生徒に浸透させたのちは、『魔法の英語』で、「準動詞」「ネクサス」「テンス、アスペクト、ボイス、モダリティ」を身につけさせる方向で行こうと今考えていま

す。そして、教科書については、速くプリントが終わった生徒の「チャレンジ課題」として与えようと思っています。教科書の使い方もそうですが、まだまだ僕の実践にはムダが多いことが改めて分かりました。学年共通の文法問題の定期テストへの出題も、たしかにその観点では「無駄」でしかありません。繰り返しになりますが、文章を深く読む英語の授業に少しでもはやく移行できるよう、無駄のない授業運営を心がけていきたいと思います。

2点目は、テスト問題の未熟さです。先生に指摘されたとおりに、まだまだ暗記力しか問えていない内容になっています。たとえば、the house でつけるべき「幹」は、「関係代名詞のある複文をもとの二つの単文に分解できるか」ということです。これからは、「枝葉」ではなく、ずばっと「本丸」を問うような問題作りを心がけたいと思います。さらに強く読むところを○する、読み方をカナで書かせる、脚韻を指摘させるといった問題は、実技テストですむ問題で、わざわざペーパーで再度問う意味がない点も指摘していただき、確かにそうだなと反省しました。それと、点数が100点満点ではない点や、点数が小刻みなところは、生徒のやる気向上にはつながりにくいのでは、という点もご指摘いただきました。それと自由英作文の出題方法が、生徒の自己表現力をのばすものや、生徒の生活の中からの声を拾い上げるものになっていない、ただの「会話ごっこレベル」に過ぎないという指摘もいただきました。まさに、その通りですので、改善を目指していきたいと思いません。

3点目は、「先頭と最後尾をつかんで引っ張る」です。僕の実践で、なぜいつまでもやらない生徒がやらないままなのか理由は、そこにあるという指摘をいただきました。「トップ5名とビリ5名を固有名詞で指摘し、テストで何点取っているか即答できるくらい、クラス集団をしっかりと把握できていないとおかしい、先頭と最後尾をひっぱることを忘れるな」というご指摘は、耳が痛かったですが、その通りです。さらに、「何人かは、切る勇気をもって合格点をあげないようにしないと、いつまでたっても、やらない生徒は走り出さない」というご指摘も、まさにその通りで、授業において、生徒とどう対峙するかをもう一度考え直すきっかけをいただきました。

この3点以外にも、生徒に書かせる振り返り作文をワープロで提出させることもアドバイスいただきました。たしかに、生徒たちの日本語での論理的な表現力の伸長を期すのであれば、僕が寺島先生に求められているようなレポートの書き方と同じ指示を生徒に出す方が、生徒のためにもなるし、僕の実践を皆に伝える際の労力も減ります。非常にためになるアドバイスをいただきました。

今回、寺島先生とお話をさせていただいたおかげで、中間テスト以降、どんな授業をするか、再考すべきでだと痛感できました。今の僕の「寺子屋式マラソン授業スタイル」でも、ある程度の生徒からは、やる気を引き出すことができているのですが、やはり、限界があります。「プリントが2種類あってわかりにくい」「プリントばかりであきてくる」「めんどくさい」など、生徒の不満の声も実は少なくありません。その解決には、「授業に型をつけること」「教育を科学にするため、自分のオリジナリティや創造力をひけらかす前に、まずは先行実践を追試すること」が必要です。

あまり奇を狙わず、叡智の結晶である教材をそのまま使うことにします。それとごちゃごちゃいくつもやらないで、やる教材を絞り込んでいきたいです。ですので、先述の通り、『魔法の英語』を使って、ネクサスと動詞のテンス、アスペクト、ボイスを帰納的に学習

させたいです。そして、できるだけ速い段階で、表現読みや構造読みの世界の授業にもっていきたいです。